

白山人類学

HAKUSAN JINRUIGAKU

11号 2008年3月

特集論文

《特集》ヨーロッパのマイノリティ

序論

山本須美子

左翼運動からマイノリティへ

——在独アレヴィーのマイノリティ化の様相

石川真作

現代フランスにおける「ピエ・ノワール」

——その生成とそれが目指すものに関する一試論

足立綾

在仏モロッコ移民の国境を越えた社会関係と国籍

——帰化による法的地位と差異の制定

渋谷努

「移民」か「イギリス国民」か

——アレクサンダー・D・グレートのカリブソから

読み解く「ウェスト・インディアン」の歴史

木村葉子

School Performance of Second-generation Chinese in the EU:

A Comparison of the U.K. and France

山本須美子

論文

インドネシア帰国華僑から「中国系インドネシア系移民」へ

奈倉京子

北マリアナ諸島からの引揚者——八丈島民の移民事例を中心として

對馬秀子

資料

ナマコ保全とワシントン条約——経過報告

赤嶺淳

研究紹介

ハンセン病市民学会に期待するもの

国本衛

台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究

——「日本」認識をめぐる

植野弘子

Hakusan Review of Anthropology

白山人類学研究会



AULISTA
PARTIDO REPUBLICANO

1908-2008
ブラジル日本
移民百年



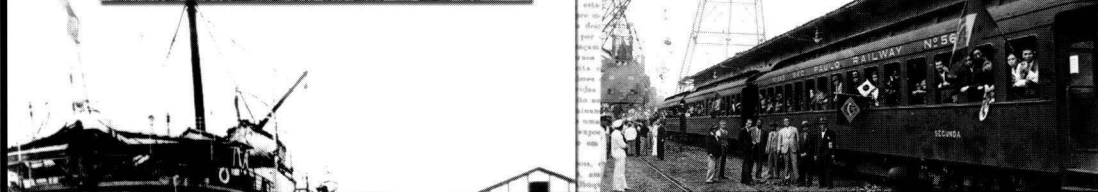
好評発売中

風響社

【ブラジル日本移民百年史 別巻】 ブラジル日本移民史料館・ブラジル日本移民百年記念協会百年史編集委員会 編

目でみるブラジル日本移民の百年

第一回移民船出港以来、百年におよぶ日系人の苦闘と栄光の歩み。
現地の総力を結集し、厳選した写真に日本語・ブラジル語の解説を付す。
ブラジル日系人を知る究極の一冊であり、日本とブラジルをつなぐ架け橋である。



【体裁】B5判・並製カバー・200頁・写真200余（ダブルトーン印刷） 【定価】2000円（本体1905円＋税）（ISBN978-4-89489-500-3）
発行所 株式会社風響社 〒114-0014 東京都北区田端4-14-9電話03-3828-9249 FAX03-3828-9250 <http://www.fukyo.co.jp>
なお、百周年を記念して全国で「日伯交流年 ブラジル日本移民百年記念写真展——新世界に渡った日本人」が好評巡回中です。
共催：独立行政法人国際協力機構・ブラジル日本移民百年記念協会。詳細は<http://www.jomm.jp/events/2007/brasil.html>

白 山 人 類 学

11 号

2008 年 3 月

目 次

特集論文

《特集》ヨーロッパのマイノリティ

序論	山 本 須 美 子 …… 1
左翼運動からマイノリティへ ——在独アレヴィーのマイノリティ化の一樣相	石 川 真 作 …… 5
現代フランスにおける「ピエ・ノワール」 ——その生成とそれが目指すものに関する一試論	足 立 綾 …… 27
在仏モロッコ移民の国境を越えた社会関係と国籍 ——帰化による法的地位と差異の制定	渋谷 努 …… 51
「移民」か「イギリス国民」か ——アレクサンダー・D・グレートのカリプソから 読み解く「ウエスト・インディアン」の歴史	木 村 葉 子 …… 69
School Performance of Second-generation Chinese in the EU: A Comparison of the U.K. and France	山 本 須 美 子 …… 95

論 文

インドネシア帰国華僑から「中国系インドネシア系移民」へ	奈 倉 京 子 …… 119
北マリアナ諸島からの引揚者 ——八丈島民の移民事例を中心として	對 馬 秀 子 …… 147

資 料

ナマコ保全とワシントン条約——経過報告	赤 嶺 淳 …… 167
---------------------	--------------

研究紹介

ハンセン病市民学会に期待するもの	国 本 衛 …… 175
台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究 ——「日本」認識をめぐって	植 野 弘 子 …… 179

HAKUSAN JINRUIGAKU

Hakusan Review of Anthropology

Vol. 11

March 2008

CONTENTS

Articles

Special Theme: Minorities in Europe

YAMAMOTO Sumiko	Introduction.....	1
ISHIKAWA Shinsaku	From Leftist Movement to Minority: An Aspect of the Formation of Alevis as a Minority in Germany	5
ADACHI Aya	The Pieds-Noirs in Contemporary France	27
SHIBUYA Tsutomu	Nationality and Transnational Social Relationships for Moroccan Immigrants in France: Legal Statuses and Institutions of Differentiations by Naturalization.....	51
KIMURA Yoko	'Immigrants' or 'British Citizens': A History of the West Indians in Lyrics of Calypso Written by Alexander D Great	69
YAMAMOTO Sumiko	School Performance of Second-generation Chinese in the EU: A Comparison of the U. K. and France	95

Articles

NAGURA Kyoko	Identity and its Change of Indonesia-returned Chinese	119
TSUSHIMA Hideko	Returning from the Northern Mariana Islands to Japan after World War II: A Study on the Migration of the Hachijou Islanders	147

Research Notes and Activities

AKAMINE Jun	Sea Cucumber Conservation and the Washington Convention: A Preliminary Report.....	167
KUNIMOTO Mamoru	Civil Society for Studies on Hansen's Disease: My Expectations	175
UENO Hiroko	Study of Historical Anthropology on Colonialism in Taiwan: On the Taiwanese Views on "Japan"	179

『白山人類学』投稿規定

1. 本誌の名称および目的

本誌は、日本語名を『白山人類学』、英語名を *Hakusan Review of Anthropology* と称し、白山人類学研究会の会誌として、会員による研究成果の発表およびこれに関連する情報・資料を提供するものである。本誌は年1回3月に刊行される。

2. 投稿資格

投稿は原則として本会会員に限る。ただし、編集委員会は非会員に対しても寄稿を依頼することがある。

3. 掲載原稿

原稿は、広義の人類学的な視点に立った研究成果を中心とする。その種類は、原則として以下のように区分する。

- a. 論文（研究成果の発表）
- b. 研究ノート（試論的な報告）
- c. 翻訳（日本語以外の言語による論文の日本語訳）
- d. 資料（フィールドワーク等に基づく一次資料、原典史料の提供）
- e. 書評（新刊書の書評）
- f. 資料紹介・研究活動紹介（公刊資料や研究活動、学会集会などの紹介）
- g. フィールド通信（フィールドワークの記録や短報）

a-c は400字詰め横書き原稿用紙で概ね60枚以内、d は30枚以内、e-g は15枚以内とする。いずれも未発表のものに限る。原稿には論文タイトル、投稿者の氏名、所属機関、連絡先（Eメールアドレス）、英語タイトル、ローマ字氏名、所属の英語名を付記すること。aおよびbには、200-500語程度の英文要旨、日本語および英語のキーワードをつける。

4. 原稿の作成・投稿の手続き

- (1) 原稿の作成にあたっては、本誌の執筆要項にしたがうこと。
- (2) 使用言語は日本語または英語に限る。日本語については、できるだけ常用漢字・新かなづかいを使用する（英語論文の執筆要領等については、編集委員会に相談すること）。
- (3) 原稿は原則としてMSワードで作成し、フロッピーディスク等の電子媒体に保存の上、編集委員会に郵送する。電子媒体には執筆者名および使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- (4) Eメールに原稿ファイルを添付し、投稿することも認める（ただし(6)に留意）。
- (5) (3)(4)いずれの場合も、日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等をかならず別紙の投稿票の様式にしたがって記載し、原稿とは別に「投稿票」ファイルに保存して、編集委員会に送付すること。投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記8「原稿の送付先・問合せ先」参照）からダウンロードすることもできる。
- (6) Eメールに原稿ファイルを添付して投稿する場合も、かならず投稿票を編集委員会に郵送すること（Eメールの不通等による原稿受理のミスを防ぐため）。

- (7) ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員会に相談すること。
- (8) 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、そのファイルを保存した電子媒体とあわせて、プリントアウトしたものを編集委員会に郵送すること。原稿採用後の図、表、写真の提出方法については、編集委員会が別途指示する。
- (9) 原稿（図、表、写真、フロッピーディスク等の電子媒体を含む）は、本誌への採否に関わらず投稿者に返却しない。刊行後しばらく保管した後、編集委員会で処分する。
- (10) 各号の投稿締切日は毎年10月31日とする。

5. 原稿の採否・最終原稿の提出手続き

- (1) 論文・研究ノートの採否ならびにその区分については、投稿、依頼を問わず、本誌の査読規定にしたがうものとし、原則として2名の査読者（レフェリー）による査読の上、編集委員会が決定する。原稿採用の条件として原稿の修正を求める場合がある。
- (2) 採用決定後は、プリントアウトした最終原稿および最終原稿のファイルを保存したフロッピーディスク等の電子媒体を編集委員会に郵送する。この際、前記の投稿票をプリントアウトし、最終原稿に同封すること。Eメールに最終原稿のファイルを添付し、送付することも認める。ただし、その場合もかならずプリントアウトした最終原稿および投稿票を編集委員会に郵送すること。
- (3) 著者による校正は、原則として初校のみとする。誤植以外の変更は、必要最低限にとどめる。加筆および訂正が必要以上に多い場合は、採用を取り消すこともある。

6. 原稿料の支払い等

- (1) 原稿料の支払いはしない。
- (2) 抜き刷りは、著者負担で作成することとする。

7. 著作権

採用原稿については、著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権（いずれも電子形態による場合を含む）を白山人類学研究会代表に譲渡することとする。

8. 原稿の送付先・問合せ先

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学社会学部

『白山人類学』編集委員会

植野弘子（編集委員長） 長津一史

E-mail: 植野 uenohi@toyonet.toyo.ac.jp / 長津 nagatsu@toyonet.toyo.ac.jp

*Eメールに添付して原稿を送付する場合は、かならず双方あてに送信すること。

白山人類学研究会ウェブサイト

http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/hakusan_jinruigaku/body/index.html

9. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員会の承認によっておこなう。

10. 附則

本規定は、2008年4月1日から施行する。

『白山人類学』執筆要領

はじめに

本誌の表記と体裁を統一し、多くの読者に読みやすいものとするため、この執筆要領にしたがってご執筆ください。執筆要領の内容は主として論文および研究ノートの作成を念頭においていますが、その他の原稿を作成する場合も、原則としてこの執筆要領に準拠してください。

1. 原稿の形態

- 1-1 原稿は原則として MS ワードで作成し、フロッピーディスク等の電子媒体に保存の上、編集委員会に送付する。電子媒体には執筆者名および使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- 1-2 E メールに原稿ファイルを添付し、投稿することも認める。
- 1-3 1-1、1-2 いずれの場合も、日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等をかならず別紙の投稿票の様式にしたがって記載し、原稿とは別に「投稿票」ファイルに保存して、編集委員会に送付すること。
- 1-4 E メールに原稿ファイルを添付して投稿する場合も、かならず投稿票を編集委員会に郵送すること（Eメールの不通等による原稿受理のミスを防ぐため）。
- 1-5 ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員会に相談すること。
- 1-6 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、そのファイルを保存した電子媒体とあわせて、プリントアウトしたものを編集委員会に郵送すること。原稿採用後の図、表、写真の提出方法については、編集委員会が別途指示する。
- 1-7 投稿原稿の MS ワードの設定は、A4 版、横書き、余白：上下左右 30mm、一行の文字数：38 字、行数：40 行、行間：1 行、フォントサイズ：11 ポイント、用紙の端からの距離：ヘッダー・フッターともに 15mm とすること。
- 1-8 日本語は、章の表題、節の表題については全角 MS ゴシック、本文および脚注文については全角 MS 明朝を使用する。
- 1-9 ローマ字アルファベット・数字は、原則としてすべて半角 century を使用する。
- 1-10 英文要旨については、原則として英文校閲の専門家による校閲を受けたものを提出すること。なお、編集委員会が別途、英文校閲の専門家に依頼して、言語的修正をおこなうこともある。

2. 論文の構成

- 2-1 原稿は以下のような構成とする。ただし、翻訳、資料、書評、資料紹介・研究活動紹介、フィールド通信には、キーワードおよび英文要旨を付さない。翻訳の原文が英語の場合は、英語タイトルを重ねて記す必要はないが、原文が英語以外の場合は原文タイトルの英語訳を記す。
 - (1) 日本語タイトル
 - (2) 日本語氏名
 - (3) 日本語所属（**大学**研究科等）

(4) E メールアドレス

(5) 英語タイトル

* 英語タイトルについては編集委員会の責任で変更を加えることがある。

(6) ローマ字氏名

(7) 所属の英語名

* なお、最終原稿において所属は、氏名の末尾に上付きアスタリスク（＊，日本語氏名末は全角 MS 明朝，英語氏名末には半角 century）を付して，脚注ブロックにアスタリスク（半角 century）を入れ，半角スペースをあけて，所属のみを日本語で，続けて全角セミコロン（；）の後に，所属・住所 / E メールアドレスを英語で記す。

例：

* 東洋大学社会学部；Department of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ hakusantarou@toyonet.toyo.ac.jp

(8) 英文要旨（200-400 語程度）

(9) 日本語キーワード（5 語前後）

(10) 英語キーワード（5 語前後）

(11) 本文

(12) 注

* 脚注方式とし，各ページの下部に示す。

(13) 謝辞（必要な場合）

(14) 参考文献（見出しは「参考文献」とする。参照文献，引用文献等としない）

(15) 図，表，写真は，原則として原稿本体とは別に準備し，そのファイルを保存した電子媒体とあわせて，プリントアウトしたものを編集委員会に郵送する。本文中に挿入箇所を示しておくこと。図，表，写真についても，電子ファイルの形式は，原則として MS ワードによるものとする。他のファイル形式で提出する場合は，投稿時に編集委員会に相談すること。原稿採用後の図，表，写真の提出方法については，編集委員会が別途指示する。

2-2 章・節等の表記は，以下のとおりとする。

(1) 章番号は，半角ローマ数字（I，II…，フォントは century）で示す。

(2) 節番号は，半角アラビア数字（1，2…，フォントは century）で示す。

(3) 節以下を細分する場合には，(1) / 1-1 / 1.1，(2) / 1-2 / 1.2…などを適宜用いる（書式は統一すること）。

(4) 章，節には数字だけではなくかならず表題をつける。ただし，「はじめに」「むすび／おわりに」には数字をつけない。

(5) 章のローマ数字は，全角特殊文字（Ⅰ，Ⅲ，Ⅳなど）を用いず，かならず半角 century（I，III，IV など）で入力すること。II，IV，IX などは，I，V，X などの組み合わせで入力する（例：IV は“Ⅰ”と“Ⅴ”を組み合わせる）。

(6) 章と節の数字の後ろに点はずけず，半角 2 文字分のスペースを入れて表題を記す。

(7) 章見出しの前と後ろの行にはそれぞれ 1 行分の空行を，節以下の見出しの前の行には 1 行分の空行を入れること。

3. 日本語文章の表現

- 3-1 本論では、現代かなづかい（ただし引用文は原文どおり）を用いる。
- 3-2 字は新字体を用い（引用文の場合も）、難しい漢字はなるべく避ける。
- 3-3 接続詞、副詞、助動詞、代名詞はなるべくかな書きにする。
例：所謂→いわゆる 丁度→ちょうど 又→また、但し→ただし
- 3-4 繰り返しの記号のうち、かな文字の反復記号（ゝ等）は避け、漢字の反復記号（々）は用いる。
例：あゝ→ああ 人人→人々
- 3-5 句点はマル（。），読点はカンマ（，）を用いる。いずれも全角にすること。
- 3-6 漢字名以外の外国の人名・地名等はカタカナで表記する。必要に応じ、初出時にマル括弧内に原綴りを記す。
例：ギアツ（Clifford Geertz），サンダカン（Sandakan）
- 3-7 和文にかかる括弧（マル括弧，大括弧，キッコウ括弧等）は，原則としてすべて全角とする。
- 3-8 パソコンの機種依存文字は文字化けの原因になるので，できるだけ使用しない。たとえば，①は(1)，ⅢはIIIとする。
- 3-9 名詞を並列する場合は，全角カンマ（，），ナカグロ（・）を適宜，用いる。
- 3-10 引用文は前後にカギ括弧「」をつける。ただし，引用が比較的長いときには，改行してブロックとする。引用ブロックは左側全体を2文字インデントし，さらにその1行目を1字下げる。前後のカギ括弧「」はつけない。引用ブロックと前後の本文との間には1行分の空行を入れる。引用の直後に文献を指示する。引用文中の引用者補記は，キッコウ括弧〔〕に入れる。

4. 数字・年号

- 4-1 数字は，数値の表現には半角アラビア数字，概念の表現には漢数字を使用する。適宜，桁を区切る半角カンマ（，）をいれる。
例：1990 年，3,120 人，一流，第二次世界大戦
- 4-2 分数は，3 分の 1，20 分の 7 のように示す。パーセントは %（半角 century）とする。
- 4-3 数の幅は半角ハイフン（-）を用いる。
例：3-6 人，1880-90 年
- 4-4 メートル，トン等の数値単位はカタカナ書きとする。
- 4-5 年号には原則として西暦を用い，必要に応じて日本の元号，中国暦，朝鮮暦，ジャワ暦，イスラーム暦などを併記する。
- 4-5 図，表は横書きを原則とする。番号および表題は，図／表，図／表番号（半角数字），半角スペース 2 文字，表題の順で記す。
例：図 1 魚醤の分布

5. 参考文献

論文を書くために参照した文献ならびに引用した文献については，以下のように表記する。注をたてて表記することはしない。

5-1 文中の引用表記（以下の“＝”は、実際には表記しない）

- (1) 全角大括弧（始）＝著者名（ファミリーネームのみ）＝半角スペース＝刊行年＝半角コロン＝半角スペース＝参照／引用したページ数の範囲＝全角大括弧（終）とする（日本語文献、英語等の文献いずれも同じ）。句読点は全角大括弧（終）の後に置く。

例：

…である [末成 1999: 387-389]。…といわれている [Watson 1985: 593-594]。

- (2) 論文集を参照／引用した場合は、(1)の様式で著者名にかえて編者名を次のように記載する。日本語の文献であれば、編者名の後に「編」を付す。英語等の文献で編者が一人であれば、著者名の後に“ed.”（または ed. に相当する当該言語の単語／略語）、編者が二人以上であれば“eds.”（または eds. に相当する当該言語の単語／略語）を付す。

例：

[加藤編 2004] ／ [植野・蓼沼編 2000]

[Hefner ed. 2002] ／ [Hefner and Horvatic eds. 1997]

- (3) 編著者が複数の文献を参照／引用した場合は、編著者名を次のように記載する。日本語文献については、ファミリーネームをナカグロでつなぐ。英語等の文献については、編著者が2人であれば、編著者のファミリーネームを“and”（または and に相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上であれば、編著者のファミリーネームをカンマでつなぎ、最後の編著者のファミリーネームのみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。

- (4) 同じ文献の異なる箇所を表記する場合は、半角カンマ（,）で参照箇所を分ける。

例：

[末成 1999: 387-389, 404]

- (5) 異なる文献を同時に表記する場合は半角セミコロン（;）を用いる。

例：

[末成 1999: 387-389; 2005: 107; 山本 2005: 12]

- (6) *ibid.*, *op. cit.*, 前掲書などの表記は用いない。

5-2 参考文献一覧

- (1) 参考文献一覧は、本文または謝辞の後に「参考文献」として記す。記載するのは、本文や注で引用したものに限る。著者名のローマ字アルファベット順または50音（あいうえお）順で記載する。同一著者に複数の文献がある場合には、出版年順で文献を記す。同一著者に出版年が同じ文献が複数ある場合には1987a, 1987bなどとして区別する。
- (2) 複数の編著者の日本語文献を記す場合は、植野弘子・蓼沼康子（編）のように、編著者名をナカグロでつなぐ。ただし、カタカタ書きの外国人名を含む場合には、吉原和男／クネヒト・ペトロ（編）のように、ナカグロに代えて全角のスラッシュを用いる。
- (3) 複数の編著者の欧米語文献を記す場合、第1編著者については、氏名を倒置させてラスト・ネーム、ファースト・ネームの順とするが、第2編著者以降については、氏名を倒置させない（ただし本文中の引用では、編著者のすべてについてファミリーネームのみを記す）。編著者が2人の場合、編著者名は“and”（または and に相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上の場合は、編著者名はカンマでつなぎ、最後の編著者名のみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。

- (4) 日本語・欧米語以外の文献の記載法は、欧米語文献の例に準ずるが、著者名のファースト・ネーム、ラスト・ネームなどの配列は各言語の慣例にしたがう。
- (5) 雑誌名は原則として略語ではなく全て表記する。煩雑さを避けるために略語を使う場合は、略語一覧を参考文献表の冒頭に記す。
- (6) 副題は、原典の形式に関わらず、日本語文献の場合は全角ダッシュ二つ (——), ローマ字アルファベット使用言語の文献の場合は半角コロン (:) で示す。

5-3 参考文献表の表記

(1) 雑誌論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『雑誌名』 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = 半角スペース = イタリック雑誌名 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 半角ピリオド

例:

馬淵東一

1997 「高砂族の冠婚葬祭」『台湾原住民研究』2: 3-20.

Watson, Rubie S.

1985 Class Differences and Affinal Relationships in South China, *Man* 16: 593-615.

(2) 論文集に掲載されている論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『論文集名』 = 編者名 = 全角マル括弧 (始) = 編 = 全角マル括弧 (終) = 全角カンマ = 所収ページ範囲 = ページ = 全角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = In = イタリック論文集名 = 半角カンマ = edited by = 編者名 = 半角カンマ = pp. = 半角スペース = 所収ページ範囲 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1999 「ベトナムから見た漢族家族の特徴」『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』末成道男 (編), 387-408 ページ, 東京: 風響社.

Watson, James L.

1986 Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group, In *Kinship Organization in Late Imperial and Modern China, 1000-1940*, edited by Ebrey, Patricia Buckley and James L. Watson, pp. 274-292, Berkeley: University of California Press.

(3) 単行本の場合

〔日本語〕 著者名(改行) = 発行年 = 半角スペース2文字 = 『書名』 = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名(改行) = 発行年 = 半角スペース2文字 = イタリック書名 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入婚へ』 東京: 東京大学出版会.

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*, London: The Athlone Press.

(4) 論文集の場合

〔日本語〕 編者名 = 全角マル括弧(始) = 編 = 全角マル括弧(始)(改行) = 発行年 = 半角スペース2文字 = 『書名』 = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 編者名 = 半角マル括弧(始) = ed(編者が一人) / eds(編者が二人以上) = 半角ピリオド = 半角マル括弧(終)(改行) = 発行年 = 半角スペース2文字 = イタリック書名 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

加藤剛(編)

2004 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』 東京: めこん.

植野弘子・蓼沼康子(編)

2000 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』 東京: 風響社.

吉原和男 / クネヒト・ペトロ(編)

2001 『アジア移民のエスニシティと宗教』 東京: 風響社.

Hefner, Robert W. (ed.)

2002 *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic (eds.)

1997 *Islam in an Era of Nation-States: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(5) 再版された図書, 発行後に書籍に収録された論文を参照した場合

参照した図書の発行年を最初に記し, 半角マル括弧()内に初版年を記す。必要に応じて初版の書誌情報を入れる。

例:

馬淵東一

1974(1938)「台湾高砂族の父系制における母族の地位」『馬淵東一著作集 第三卷』9-65 ページ, 社会思想社(初版:『民族学年報』1)。

(6) その他

- ・ローマ字アルファベット使用言語の雑誌名・書名は、イタリック体とする。
- ・文献の表示の最後には、日本語・中国語の場合は全角ピリオド(。), ローマ字アルファベット使用言語の場合は半角ピリオド(.)を付す。
- ・日本語, 中国語, ローマ字アルファベット使用言語以外の言語の文献の記載は, 当該言語の慣習的な表記法にしたがう。

6. 注

- 6-1 注は脚注とする。文中で言及する場合は、かならず「注」と記す。「註」は使用しない。
- 6-2 注番号は1からおこし, 1)のように半角数字, 右側のみの半角マル括弧(終)で示す。フォントはcentury。注の数字とマル括弧は, 本文中では注を付す箇所の右肩に上付きでつける(例: ~である¹⁾)。ただし脚注ブロック内の注番号は, 通常のフォントサイズで記し, 上付きとしない。
- 6-3 投稿原稿における脚注ブロックの書式は任意とする。ただし, 採用後提出する最終原稿においては, 原則として脚注ブロック内のフォントサイズ, 段落とも本文と同様にする。
- 6-4 注は原稿枚数に含まれる。枚数の10%以内を注の分量の目安とする(たとえば50枚の場合は5枚以内)。

7. 図・表・写真

- 7-1 図, 表, 写真は, 原則として執筆者が作成したものをそのまま掲載する。本文中に挿入箇所を分かりやすく示すこと(例:「→図1を挿入」)。
- 7-2 図, 表, 写真には, 通し番号をつける(例: 図1, 図2..., 表1, 表2...)。また, 番号だけでなくかならず表題またはキャプションをつける。
- 7-3 図および写真の表題(またはキャプション)は下, 表の表題は上に記す。
- 7-4 図, 表ともに作成の際に使用した資料・文献を「出典: **」というように明示する。写真の場合は, 撮影者を「**撮影」(または「出典: **」)というように明示する。

8. 歴史的呼称

歴史的呼称は当時の呼称にしたがい, 新字体・現代かなづかいで表記する。

9. その他の注意

ワープロソフトを使用する際には, 以下の点に注意して原稿を作成すること。

- 9-1 入力画面では区別がつかなくても, 印字するとその差が目立つ文字, 記号。

例: ー(長音)とー(ハイフン)

X(ローマ字のエックス)と×(バツ), 1(数字)とl(Lの小文字)

- 9-2 日本語の文字および外国文字については, 原則としてウィンドウズXPで使用可能な文字で入力する。英語表記で用いられるローマ字アルファベット以外の外国文字, 別途インストールが必要なフォント, その他の特殊な文字・記号・フォントを使用する場合は, 事前に編集委員会に相談すること。

『白山人類学』査読規定

1. 目的

白山人類学研究会は、『白山人類学』の学術雑誌としての水準を確保するため、査読の制度をおき、その運営については編集委員会が責任をもつ。

2. 対象

査読制度の対象となるのは、『白山人類学』に投稿された原稿（編集委員会からの依頼原稿を含む）のうち、論文および研究ノートとしての掲載を目的とするものである。

3. 査読者

編集委員会は、投稿された原稿1編について、2名の査読者を選定し査読を依頼する。査読者の氏名は投稿者に通知しない。また、投稿者の氏名も査読者に通知しない。

4. 査読の過程

査読者は、主に下記の第7項に挙げられた項目について、査読対象の原稿を評価し、掲載に関する判定をおこなう。査読者は、原稿に修正を求める場合、修正すべき点について具体的なコメントを記さなければならない。査読者は、定められた期日以内に、編集委員会に対して原稿の掲載に関する判定結果とその根拠を表明しなければならない。

5. 原稿の採択

編集委員会は、査読者の査読結果を十分に考慮・検討して、原稿掲載の可否を決定し、その結果をすみやかに投稿者に通知しなければならない。

6. 原稿の修正

再審査が必要とされた原稿の投稿者は、定められた期日までに修正原稿を編集委員会に送付しなければならない。この際、投稿者は、査読コメントに対する自らの改稿内容について、文書で説明を行わなければならない。編集委員会は、判定が「修正条件付き掲載可」の場合には、原稿の修正が適切になされていることを確認したうえで、原稿の採択を決定する。判定が「修正後要再査読」の場合は、改めて査読者に査読を依頼する。

7. 査読の項目

査読者は以下の項目などを念頭において評価、判定、掲載区分の判断をおこなう。

A. 内容の評価

- (1) 広義の人類学に関わる学術的研究に貢献しているか
- (2) 記述されている内容は正確か
- (3) 議論の展開は適切かつ論理的か
- (4) 資料および文献の取り扱いは適切か

B. 表現・形式の評価

- (1) 表題・キーワードは扱われている内容に即して適切か
- (2) 文章の表現は明瞭で読みやすいか
- (3) 全体の構成や章・節の見出しの立て方は適切か

- (4) 図・表は有意に挿入され、かつ有効に使用されているか
- (5) 参考文献の記載方法は適切か

C. 採択の判定

- (1) 掲載可(修正を必要とせず、投稿時のまま掲載が可能)
- (2) 修正条件付き掲載可(主に技術面に関わる微細な修正のみを必要とする。再査読はおこなわない)
- (3) 修正後要再査読(再査読をおこなう)
 - a) 一部の用語、表現、パラグラフ等について、書き直しを必要とする
 - b) 一部の章または節について、書き直しを必要とする
 - c) 大幅な書き直しを必要とする
- (4) 掲載不可(内容が本誌の目的に即していない、あるいは学術誌掲載の水準に達していないことが明白な場合の判定。査読者は、評価およびコメントにより、判定の根拠を示さなければならない)

8. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員会の承認によっておこなう。

9. 附則

本規定は、2007年4月1日から施行する。

白山人類学研究会

白山人類学研究会は、東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員を世話人として組織されている。定例研究会は、原則として毎月第3または第4月曜日、東洋大学5号館で開催される。また、2007年度からは年次フォーラムを開催している。8～9月は夏休み、2～3月は春休みとし、研究会は開催しない。研究会の案内は電子メールを通じておこなっている。

連絡先：研究会事務局 hakusanjinrui@mail.goo.ne.jp

白山人類学研究会 2007 年度の活動

□ 2007年4月23日第1回研究会

演題：ドーズ法（1887）時代の先住民——チャールズ・アレクサンダー・イーストマン（1858-1939）（オヒエサ）による大地の記憶の継承

発表者：三石庸子（東洋大学社会学部教授）

要旨：イーストマンは、母方の祖父は白人であるが、サンティ（東という意味）・スー・インディアン（ダコタ）で、1862年のミネソタ・スー蜂起に加わり処刑されたと思われていた父が15歳の時に迎えにくるまで、逃亡先のカナダで伝統的な先住民の生活をしていた。その後父の要請で17年におよぶ教育を受けて、医者となった。当時のアメリカ社会でもっとも活躍した先住民の一人であったが、同化政策として悪名高いドーズ法を支持したなどの理由で批判され、80年代半ばまで先住民としての貢献を評価されることがなかった。イーストマンが平原インディアン最後の戦いの時期のアメリカ社会をどのように生きたのか、イーストマンが残した多くの著作の中から、ウーンデッド・ニーの虐殺（1890）など同時代を扱ったテキストを選び、その貢献を先住民の文化伝統の中に位置づけて報告した。

□ 2007年5月21日第2回研究会

演題：ベトナム・ラムドン省に居住する異民族間の通婚関係——その歴史と新たな通婚関係の成立

発表者：本多守（東洋大学社会学研究科社会学専攻博士後期課程）

要旨：報告者の調査地であるラムドン省には、主に8民族（キン族、コホー族、マー族、ムノン族、チュルー族、ラグライ族、スティエン族、華人）が居住する。この8民族のうち、キン族、華人とマー族を除いては母系制社会を形成し、妻方居住を基本としている。一方、キン族、華人、マー族は父系制社会を形成し、夫方居住を基本とする。報告者はラムドン省に居住する

少数民族マー族、コホー族《チル集団》の研究をしているが、その調査地では、この異なる社会を形成する成員同士の通婚がみられる。

特に革命後に増えてきたのが、支配民族であるキン族と妻方居住を原則とする母系制社会を形成する少数民族間の婚姻である。この婚姻には二つのケースがある。それは支配層で行政機関に所属する者同士の婚姻と、北から計画移民、あるいは自由移民で南部にきたキン族と婚姻するケースである。多くの場合、前者はキン族が女性でキン族と少数民族が同じ職場であり、後者はキン族が男性で貧しい土地なしの移民である。前者の場合は、母系制社会で婚出しなければならぬ男子が、キン族の女性を娶り独立するケースであり、さほど違和感はない。しかし、後者の場合は貧しい農村の多子の家庭に生まれた男子が、母系制社会の女性と結婚して妻方居住をするケースである。発表者は、これら異なる社会を形成する民族の成員同士の婚姻の歴史と成立要因を明らかにしつつ、その影響について検討した。

□ 2007 年 6 月 18 日第 3 回研究会

演題：在日コリアンにおけるエスニシティと多文化的市民権

発表者：金泰泳（東洋大学社会学部准教授）

要旨：在日コリアンの当初の用語である「在日朝鮮人」という言葉が使われ始めたのは、1960 年代、日本への定着化が進み、本国の人々とは異なる歴史性とアイデンティティを意識し始めてからである。日本社会での生活の中で構築されていった「在日コリアン」であったが、日本社会におけるさまざまな不利益の処遇に対抗するため、「在日」が凝集性を高めるために「民族の誇り」などを象徴とする本質主義的な在日コリアン言説が形成されていった。

しかしこの在日コリアン言説は、あるべき在日像が指定され、それは内部の多様性を容認しない拘束性を、また内部にかかえる矛盾を隠蔽する効果を持つようになっていく。体制社会に向き合うためには民族集団に依拠しなければならないが、その民族集団が個人を抑圧する効果を持つというジレンマにおかれることになる。

カナダの政治学者ウィル・キムリッカは、社会はエスニック集団の権利を「多文化的市民権」として認めなければならないが、それ自体が内包する多元的側面に留意しておく必要があると述べている。すなわちそれは「対外的防御」と「対内的制約」である。前者は体制社会に対して自らの固有性や自決権を主張する権利であり、後者はそのための凝集性を高めるためにエスニック集団成員の個人主義的権利を制約することである。キムリッカは前者には肯定的だが後者には懐疑的である。

在日コリアンはこれまで、日本社会における不利益の処遇は正のさまざまな要求をおこなってきた。それ自体はまちがいはなかったとおもうが、自らが指摘してきた日本社会の“おかしさ”と同様の論理を集団内部で行使し、たとえば「ダブル」の人々、日本国籍者の人々、あ

るいはさまざまな立場の人々を周縁化する機能をはたしてきたのではなかったか。在日コリアンは今後、こうした点にも考慮しながら、日本社会において“責任ある”言動をおこなっていく必要があるのではないだろうか。

□ 2007年7月28日第1回研究フォーラム

ヨーロッパにおけるマイノリティ——エスニシティ・地域コミュニティ・教育

オーガナイザー：山本須美子（東洋大学社会学部准教授）

趣旨説明：ヨーロッパ諸国は、第二次大戦後の産業復興のために、1960年代をピークに多数の外国人労働者を受け入れた。その数は、例えば現在イギリスでは総人口の約8%を占めるまでになっている。外国人労働者の多くは定住の途を選んだために、各国は多文化・多民族の共生をめぐって、様々な問題を抱えている。

本研究フォーラムでは、日本では数少ないヨーロッパのマイノリティを研究対象とする人類学者が一堂に会し、最新のフィールドワークで得たデータを基に、現代ヨーロッパにおけるマイノリティ社会のダイナミクスについて論じた。EUの拡大・深化が進行している現在、ヨーロッパ各国のマイノリティをめぐる問題を比較検討することは、国民国家というヨーロッパ起源の政治的枠組みを内側から問い直し、新たな共同体構築の可能性を探る一步になる。さらに本フォーラムでは、東南アジア研究者からのコメントをふまえて、国家とマイノリティの関係についての地域間比較に向けた展望を開くことを試みた。なお、本誌の「《特集》ヨーロッパのマイノリティ」は、このフォーラムの成果にもとづくものである。

プログラム、タイトル、発表者は、以下のとおりである。

— 11:00 ~ 11:40 —

タイトル：移民の地域活動にみる共生と葛藤

発表者： 澁谷努（東北大学文学研究科専門研究員）

— 11:40 ~ 12:20 —

タイトル：現代フランスと＜ピエ・ノワール＞——＜セルクル・アルジェリアニスト＞の活動からの一考察

発表者： 足立綾（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

— 13:30 ~ 14:10 —

タイトル：対話・承認・共生——ドイツにおけるトルコ系イスラーム団体の歴史

発表者： 石川真作（京都文教大学客員研究員）

— 14:10 ~ 14:50 —

タイトル：都市に共生するマイノリティ——祝祭組織の構成員からみるロンドン

発表者： 木村葉子（名古屋大学大学院文学研究科博士課程）

— 14:50 ～ 15:20 —

タイトル：移民第二世代の学校適応とエスニシティ——イギリスの中国系移民の事例から

発表者： 山本須美子（東洋大学社会学部准教授）

— 15:40 ～ 16:10 —

コメント——地域間比較の視点から

相沢伸広（日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター研究員）

奥島美夏（神田外語大学異文化コミュニケーション研究所講師）

— 16:10 ～ 17:00 —

総合討論

□ 2007 年 10 月 22 日第 4 回研究会

演題：ナイジェリアの王を生み出す人々——ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権的社会

発表者：松本尚之（東洋大学国際共生社会研究センター助手）

要旨：ポスト植民地時代のアフリカ諸国において、特に 1990 年代に入って顕著となった現象の一つに、「首長位の復活」と呼ばれるものがある。多民族が共生するアフリカの様々な国で、国家が各民族の王や首長を保護し地域社会の代表として一定の権限を与える政策をとっており、近代国家と伝統的権威者が並び立つ状況が見られるのである。

本発表では、ナイジェリアのイボ社会を事例とし、「首長位の復活」と呼ばれる現象が、もともと王や首長と呼べる権威者をもたない非集権制の社会に与えた影響を論じた。議論においては、主に国家政策を契機として創られた権威者の地位が持つ正統性の源を分析し、国家に包摂された現代のアフリカの社会的文脈において、王や首長の地位が持つ役割や意味について考察した。

□ 2008 年 1 月 28 日第 5 回研究会

演題：熊野文化のダイナミクス——熊野学と文化にまつわる複数の言説をめぐって

発表者：山本恭正（岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程）

要旨：今日、文化の概念は政治的意味に彩られ、それをめぐってさまざまな現象を生み出してきた。日本では本来、民俗学が扱う領域とされ、地元でさえ記憶の片隅に追いやられてきた風習や伝統行事が、意識的に「文化」とされ広く流通するような「言説」が多くみられる。

平成 16 年 7 月に紀伊山地の霊場と参詣道、通称・熊野古道がユネスコの世界遺産に登録されたことで、熊野の文化遺産や景観が一躍脚光を浴びることになった。本発表では、熊野を事例として日本の地域社会における文化の構築の問題を取りあげた。今まで熊野地方において

「文化」と呼ばれていたものは、具体的に何であったのか。またそうでないものが、ある時期からそう呼ばれるようになったのはなぜか。そこにどのようなプロセスが存在し、背後にどのような力関係が作用しているのか。本発表ではこれらの問いを念頭において、世界遺産の登録と時期を同じくして成立した「熊野学」と呼ばれる地域学での言説や、それに関連した研究会の活動などから、「熊野文化」の表出のされ方について考察した。

編集後記

昨年度発行の第10号から、『白山人類学』を全面的にリニューアルした。表紙、サイズ、用紙、レイアウトを一新し、論文には英文要旨を付すことを義務づけ、査読、著者校正を厳密にするなど、本誌の学術誌としての質とレベルを高めるべく努めた。様式の統一性ならびに学術水準を保持し、同時に論文投稿者への便宜をはかり、掲載・発行までの手続きを円滑化するため、投稿規定、執筆要領、査読規定もより詳細でわかりやすいものに改訂した。

白山人類学研究会は、大学院・学科教員と学生の手によってつくられ、維持されてきた。和やかな雰囲気はこの研究会の魅力ではあるが、研究生活には厳しさも必要である。本誌の改訂は、これまで研究会を支えてきた先人に敬意を払いつつも、研究会と会誌のさらなる発展、学術レベルの向上を求めてなされたものである。今回も査読者から厳しいコメントを受けた論文が少なくなかった。研究会会員以外の研究者による査読は、とりわけ厳正であったが、投稿者にとって有益なものであったことは間違いないだろう。本誌と本誌への投稿が、会員の皆さんの研究活動に資するよう、編集委員は引き続き尽力したい。

今号では特集『ヨーロッパのマイノリティ』を組み、5本の論文を掲載した。特集は、2007年7月に開催された第1回白山人類学研究フォーラム『ヨーロッパにおけるマイノリティ——エスニシティ・地域コミュニティ・教育』での発表をもとに企画されたものである。いずれの論文も、インテンシヴなフィールドワークにもとづいて、ヨーロッパのマイノリティ社会の動態やマジョリティ社会との相互作用を論じ、周縁者の視点からヨーロッパの近現代史を再検討している。評価は読者に委ねるしかないが、企画者である山本須美子会員の尽力には編集委員から謝意を表

したい。他にも、「資料」1編と「研究報告」2編の投稿を受けた。本誌が学術情報の交換の場として機能するよう、今後、こうした短報の掲載の充実もはかっていく。論文とともにも、会員の皆さんの投稿を期待している。教員の皆さんには、大学院生などの若手研究者に投稿を促していただきたい。なお、蛇足ながら、執筆のさいには投稿規定、執筆要領、査読規定を熟読するようお願いしたい。

本文末尾にも付記したが、研究報告「ハンセン病市民学会に期待するもの」を寄稿してくださった国本衛さんは、2008年3月21日に永眠された。国本さんは、ハンセン病違憲国家賠償訴訟原告団の精神的支柱であり、ハンセン病市民学会の設立に尽力された方である。また、2008年5月に開催予定の第4回ハンセン病市民学会東京大会の運営委員長でもあった。しかし本稿が、ご遺稿になってしまった。心よりご冥福をお祈りいたします。

(植野弘子・長津一史)

『白山人類学』投稿票

記載日: 年 月 日

ふりがな 投稿者 氏 名	
所属機関・職	

投稿の種類（丸で囲む）	論文 研究ノート 翻訳 資料 書評 資料・研究活動紹介 フィールド通信
タイトル（日本語）	
タイトル（英語）	
本文の総枚数（英文要旨は除く。注は含める）	400 字詰 枚
図・表・写真 の有無と点数	有 ・ 無 点
使用したワープロソフトの種類（原則として MS ワード）、ソフトのバージョン、保存した電子媒体の種類、E メールにより投稿した場合は送信した日付	

連絡先（所属機関、自宅のいずれでも可。住所と E メールアドレスはかならず記入すること）

住所			
電話番号 （任意）		FAX 番号 （任意）	
E メールアドレス			

* 投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記）でダウンロードできます。

http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/hakusan_jinruigaku/body/index.html

白山人類学

第 11 号

定価：本体 2000 円＋税

発行日

2008 年 3 月 31 日

編集：発行

白山人類学研究会

〒 112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 松本誠一 気付

編集協力

穂高書店 (Hotaka Book Co., Ltd)

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-15

TEL 03-3233-0331

FAX 03-3233-0332

E-mail info@hotakabooks.com

<http://www.hotakabooks.com>

発売

岩田書院 (Iwata Shoin)

〒 157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103

TEL 03-3326-3757

FAX 03-3326-6788

家族社会学への

いざない

清水浩昭編著／1800円

2008.04刊／A5判・164頁

入門篇・基礎篇・応用篇の3篇14章で構成。特に親子関係・夫婦関係から社会構造を考察する。

韓国の宗教と

祖先祭祀

韓国宗教民俗研究会編

A5判・356頁／8900円

ハングル版『宗教と祖先祭祀』(2005)の日本語版。片茂永ほか11編収録。星合・姜=訳。(2008.03刊)

説話伝承の脱領域

説話・伝承学会創立25周年記念論集 16800円

小南・福田・三原・井本の記念講演の他、文献から出発して、フィールドをめぐって、国外へ向かって、の3部24編。(2008.04刊／A5判・528頁)

武州御嶽山信仰

西海賢二著 2008.05刊／A5判・380頁／8900円

山岳信仰と地域社会：上 前著『武州御嶽山信仰史の研究』(1983)を大幅に増補・改稿。近世の山岳信仰を、講集団を中心に歴史民俗学的に考察。

山に暮らす

山梨県の生業と信仰

堀内 真著 2008.02刊／A5判・328頁／8900円

道祖神信仰や小正月行事、夕顔を作らないという禁忌伝承、焼畑のムラの生活など、山間地域に暮らす人々の生業と信仰の姿を記録する。

霧島山麓の

森田清美著

2008.02刊／A5判

578頁

隠れ念仏と修験

11800円

念仏信仰の歴史民俗学的研究 「カヤカベ教」などの南九州における民俗宗教の実態を詳細に調査。

日本における

「山岳修験」別冊

山岳信仰と修験道

日本山岳修験学会編 2007.11刊／240頁／4000円

山岳信仰と修験道の諸相／木曾御嶽信仰／欧文他

死者のゆくえ

佐藤弘夫著 2008.03刊／A5判・252頁／2800円

日本列島に住んだ人々が、死をいかなるものとして捉え、死者をどのような存在として見ていたのか。それが時代とともにどう変化したのか――。

現代幽霊論

妖怪・幽霊・地縛霊

大島清昭著 2007.10刊／A5判・210頁／4900円

これまであまり論じられてこなかった近代以降の「幽霊」、特に現代の「幽霊」について、民俗学的に考察し、日本人の霊魂観の一端を明らかにする。

近世上野神話の世界

佐藤喜久一郎著 07.11刊／A5判・390頁／9500円

〈在地縁起と伝承者〉『神道集』と「在地縁起」との関係だけでなく、由緒・系譜・稗史などから、近世の「上野神話」の民俗性を解き明かす。

柳田国男

柳田国男研究会編／6400円

2007.11刊／A5判・280頁

同時代史としての「民俗学」

柳田国男研究 5 (年報改題) 同情と内省の同時代史へ(室井)／切り捨てられた「野の学」(杉本)／他

民俗文化財

植木行宣監修

A5判・412頁／7900円

保護行政の現場から

鹿谷勲・長谷川嘉和・樋口昭編 民俗文化を文化財として捉えてきた現場からの報告。(2007.10刊)

無形民俗文化財の

保護

●無形文化遺産保護条約にむけて

大島暁雄著／A5判・250頁／5900円

文化庁で民俗文化財の保護行政に携わった著者が、現行制度を概観し、問題を提起する。(07.12刊)

博物館の仕事

増刷出来

8人の学芸員著 07.12刊／A5判・158頁／1600円

「学芸員の仕事」を出したメンバーが、自からの体験を記す。そこから、現在の博物館・学芸員のおかれている立場や問題点が浮きぼりにされる。



岩田書院

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103 【価格は税別】

TEL:03-3326-3757 FAX:03-3326-6788 <http://www.iwata-shoin.co.jp>

Hakusan Review of Anthropology

HAKUSAN JINRUIGAKU

Vol. 11 March, 2008

Articles

Special Theme: Minorities in Europe

- Introduction YAMAMOTO Sumiko
- From Leftist Movement to Minority: An Aspect of
the Formation of Alevis as a Minority in Germany ISHIKAWA Shinsaku
- The Pieds-Noirs in Contemporary France ADACHI Aya
- Nationality and Transnational Social Relationships for
Moroccan Immigrants in France: Legal Statuses and
Institutions of Differentiations by Naturalization SHIBUYA Tsutomu
- 'Immigrants' or 'British Citizens': A History of the West Indians in
Lyrics of Calypso Written by Alexander D Great KIMURA Yoko
- School Performance of Second-generation Chinese in the EU:
A Comparison of the U. K. and France YAMAMOTO Sumiko

Articles

- Identity and its Change of Indonesia-returned Chinese
NAGURA Kyoko
- Returning from the Northern Mariana Islands to Japan
after World War II: A Study on the Migration of
the Hachijou Islanders TSUSHIMA Hideko

Research Data and Activities

- Sea Cucumber Conservation and the Washington Convention:
A Preliminary Report AKAMINE Jun
- Civil Society for Studies on Hansen's Disease: My Expectations
KUNIMOTO Mamoru
- Study of Historical Anthropology on Colonialism in Taiwan:
On the Taiwanese Views on "Japan" UENO Hiroko

Hakusan Review of Anthropology

Hakusan Society of Anthropology, Toyo University